

令和 2 年 7 月 2 日現在

機関番号：34602

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K13336

研究課題名(和文) イスラーム神秘思想における生と死の表象に関する文献学的研究

研究課題名(英文) Philological Studies for Life and Death of Islamic Mystical Thought

研究代表者

澤井 真 (SAWAI, MAKOTO)

天理大学・付置研究所・講師

研究者番号：40773734

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題では、イスラーム神秘思想において、生と死がいかに論じられるのかを、スーフィーたちイスラームの神秘家のアラビア語テキストを読み解きながら考察を行った。「生」と「死」に関して、全ての人間が肉体的に生と死を経る。この視点に加えて、スーフィーたちは精神的な生と死を語ることによって、神へ近づく道程や合一について論じようとした。

本研究では、イスラームにおける生と死に関する研究を、論文、研究発表、そして講演を通して社会に還元した。特に、それらの研究成果の多くは海外での国際集会での発表や講演として行われ、ムスリムたちを目の前にした英語で行われたものであり、最新の研究成果を国際的に広く発信した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

生と死は、あらゆる人間にとって避けることができない。非常に身近なテーマであるがゆえに、生と死はさまざまに理解される。本研究では、生と死が決して肉体的な意味だけではなく、精神的な意味でも解釈されてきたことを、イスラーム神秘思想の文脈から読み解いた。精神的な生と死に関して、イスラーム神秘思想の担い手であるスーフィーたちは、神との合一をめざすうえで、生と死という枠組みを用いて神との合一について論じようとする。彼らにとっては、生と死が象徴的なかたちで何度も体験されるのである。この点は、生と死の意味がコンテキストで異なっていることを示しており、死生観の多様性を理解するうえで非常に示唆に富んでいる。

研究成果の概要(英文)： This research considers how a view of life and death has been discussed in Islamic mystical thought by analyzing Sufis' texts, which are written by mystics in Islam. Concerning life and death, whole human beings have a real experience of life and death. Adding to such meaning, moreover, Sufis make an attempt to discuss paths to God and an experience of the divine unification by narrating the spiritual meaning of life and death.

Academic results of this research have been demonstrated through academic papers, presentations, and lectures. It is especially noteworthy that such presentations and lectures are executed not only in Japanese but also in English. Thus, this style widely denotes academic results related to the research topic.

研究分野：宗教学、イスラーム思想研究

キーワード：イスラーム 死生観 クルアーン解釈 イスラーム神秘主義 スーフィズム 神との合一 クシャイリ
- イブン・アラビー

1. 研究開始当初の背景

宗教学においては死生学研究への関心の高まりから、『死生学』をはじめとする諸研究誌において、各宗教伝統の死生観の考察が進められてきた。イスラームの死生観の基軸を成すのは、聖典クルアーンである。クルアーンは、終末に人間が樂園で得られる享楽と火獄で味わう苦しみを対比的に描くことによって、人々をイスラーム教の信仰へといざなう。終末における裁きの後、全ての人間が樂園が火獄へ行くことになる。それゆえに、生の始まりについての言及は簡潔であり、終末における死後の生の描写が中心となっている (J. Bowker, *The Meaning of Death*; 塩尻和子「クルアーンの世界観」)。

イスラーム教の死生観に関わるクルアーンの章句に対して、多くのムスリム思想家たちが様々な解釈を行ってきた。例えば、イスラームでは、人間が生と死をそれぞれ二度ずつ経るというクルアーンの一節 (2 章 28 節) がある。この節の解釈がイスラーム教における予定説と運命説とも直結しているゆえに、この節に対する解釈には思想家のあいだで相違がある。また、イスラーム教においても避妊などをはじめとする生殖医療の場においても、クルアーンやハディース (預言者ムハンマドの言行録) に基づきながら、正反対の解釈が導き出されている (青柳かおる「イスラームの生命倫理と先端医療」)。こうした議論は、イスラームには多様な死生観があることを意味している。

イスラーム神秘思想においてもまた、スーフィーたち神秘思想家は、生と死という枠組みを使用しながら、自らの思想を形成してきた。この点に関しては、シーア派の神秘思想家モッラー・サドラー (d.1640) を中心にした鎌田繁や野元晋の論考 (野元晋「イスラーム: 死と復活の思想」)、そして中国におけるムスリム思想家を扱った松本の論考 (松本耿郎「イスラームの死生観と馬復初の来世観」) などがある。

神秘主義における生と死に関する宗教学的議論は、たとえば、W・ジェイムズ (1842-1910) が『宗教的経験の諸相』 (*The Varieties of Religious Experience*, 1902) のなかで、この儀礼的な死と再生を、「二度生まれ」 (twice-born) という分類から論じている。また、こうした死と再生の儀礼の意味については、宗教学においては M・エリアーデ、また人類学においては V・ヘネップなどの議論がある。こうした捉え方は、イスラームのなかでも特にタリーカ (ṭarīqah、スーフィー修道団) の加入儀礼などのなかに見出すことができる。その意味では、生と死はイスラーム、特にイスラーム神秘思想における生と死に関する先行研究のなかに散見するものの、未だその全貌は明らかになっていない。

2. 研究の目的

本研究課題では、スーフィーたちが生と死に関する神秘主義的議論を通して、いかに神との合一を論じたか、さらに生と死に関する神秘知へ到達したのかを明らかにすることを目的とした。この研究は、同時に、生と死に関する彼らの思想を理解することによって、彼らが人間という存在をいかに捉えていたのかを明らかにすることでもあった。

3. 研究の方法

方法としては、アラビア語テキストの読解と分析によって遂行される。

4. 研究成果

イスラーム神秘思想の「生」と「死」に関する表象に関して、「死」という語を伴う議論は、その対義語として「生」が意識されながら論じられる傾向にある。しかしながら、「生」と「死」はさまざまな意味やコンテキストで用いられている。以下では、イスラームに広く見られる直線的な時間軸から見た生と死、イスラーム神秘思想に見られる円環的な時間軸から見た生と死、そしてイスラーム神秘哲学として知られる存在一性論から見た生と死、から明らかになったことを説明する。

直線的な時間軸に見られる死生観

イスラームにおける代表的な時間軸は、ユダヤ・キリスト教と同様、創造から終末へという直線的な時間軸である。人間の生と死は、この時間軸のなかに適用されるかたちで論じられる。そこで、アダムの創造によって人間の生が設定される。この意味で、人間の生は神による人間 (アダム) 創造に端を発している。その一方で、死の起源は大きな議論となっていない。言い換えれば、死の意味づけは、生の意味に対して二義的な役割を有している。その理由については、以下の二点が想定される。

第一に、イスラームの歴史書において論じられているように、死を体験した最初の人間がアベル (Hābil) であるということである。カイン (Qābil) によるアベルの殺害という聖書的なモチーフは、人間の「死」に対する消極的意味づけを付与した。それと同時に、カインとアベルによる物語を通して、妬みや死という消極的な人間の側面が描かれる。そのため、イスラームにおいても、死が積極的な意味を帯びて論じられることはなかった。こうした状況は、アダムに続く預言者が、イスラームにおいてはカイン・アベル兄弟から一世代下ったセスとみなされていることから窺える。

第二に、クルアーン全体が帯びている論調が、終末に対する試練の時としての生、さらに死に対する備えとしての生という点にある。言い換えれば、神による審きとしての死後や終末に対して、いかに現世を生きるのかという点が強調されている。「本当の生」である来世において楽園で生きるために、さらに「仮初の生」である現世をムスリムとして生きるために、生の意味が捉えなおされるのである。そのため、死は二つの生のあいだを区切るものでしかない。この意味においては、イスラームは極めて生を強調しているとみなすことが可能である。

こうした生を取り巻く議論の帰結として、創造から終末へ到る直線的な時間軸のなかに、生と死をどこに位置づけるかという議論が登場した。人間は、創造から終末までのあいだに生と死をそれぞれ二度ずつ経るというクルアーンの一節(2章28節)は、その議論を誘起する神の啓示である。生と死をめぐる一連の解釈が重要な意味をもつのは、直線的な時間軸のなかで、自らが生と死のどちらにいるのかが、「本当の生」を楽園と火獄のどちらで過ごすのかに関わっているからである。

円環的な時間軸に見られる死生観

直線的な時間軸は、クルアーンにおける神の啓示のなかに基調として見られる一方、円環的な時間軸は、神秘主義的な死生観のなかで用いられている。その最大の特徴は、生と死が何度も人間に訪れるという点にある。

クシャイリー(d.1072)は、初期のスーフィーたちの思想を体系化することに大きく貢献したスーフィーであった。同時に、彼はアシュアリー神学派の神学者でもあったため、神学の重要なテーマの一つである神名に関して議論を行っている。彼は、生と死に関して、スーフィーと神学者双方の立場が入り混じる議論を行なっている。その端的な現れが、クシャイリーの生と死に関する神名解釈である。

「神は99の名前をもつ」というハディースにしたがって、「生を授ける者」と「死を授ける者」という二つの神名は、神が有する機能として説明される。神は「永生」(al-Hayy)を有しており、それゆえに生と死を司る機能を有している。

クシャイリーの議論において、生と死は、神との合一との関わりのなかで主に論じられている。たとえば、神を自らの心のなかに想起することを生と捉える一方で、神を想い念じていない状況を死とみなす。こうした生と死の枠組みは、神との精神的連帯 生 と、神の不在 死 という対立的な状況を表している。そのため、神に没頭していない人間は、現世で身体的な生にあったとしても、精神的な死の状態にあるという。

クルアーン解釈において、クシャイリーは、神秘家たちが生と死を幾度も経る 体験する と論じている。このとき、神を知るという状況が神のなかで生きているという生を表し、その一方で、神を知らない状況が、死を表している。さらに、人間の魂が精神的に昇華せず、低次のまま存続している状況は、第一の死と捉えられる。それに対して、神と神秘的に合一し、神のなかに溶け込むことによって、神とともに生きる状況へと転換する。この状況は、第一の生と捉えられる。さらに、神が人間を眼差すことを第二の死と捉えている。さらに、神の眼差しを通して人間の自己が消え去る状況が、第二の生というかたちで形容される。このように、生と死という対概念は、神を求めるものが交互に経ることで精神的に昇華するさまを説明するために用いられる。

生と死が対義語的に使用されることで、神へ近づく経路が螺旋状に描かれている。それに対して、生でも死でもない状況に身を置くことが、神秘家たちが目指すべき立場であることが論じられている。言い換えれば、「本当の生」とは生と死の“あいだ”にあるのである。自らが生であるか死であるのかが分からない状況に生きることで、絶えず揺れ動く状況に置かれることになる。これは、まさしく生でもあり死でもある状況に置かれているとすることができる。

存在一性論に見られる死生観

イブン・アラビー(d.1240)に代表される存在一性論では、直線的な時間軸や円環的な時間軸とは異なる枠組みで、生と死が捉えられる。彼の存在の自己顕現(タジャッリー)論は、新プラトン主義的な影響を帯びているが、この存在論を前提とするとき、死とは流出論的な存在化のなかに組み込まれる。このことは、死という存在は、いわば存在の流出によって創造されたものの一つと捉えられる。

イブン・アラビーにとって、存在の流出論とは、絶対存在から人間にいたるまでの存在物の顕れを説明したものであり、いわば宇宙論である。このとき、「神」という存在は、絶対存在が「神」というペルソナを有した名前を有して、存在化したということにほかならない。人間存在もまた、絶対存在の流出の帰結である。そのため、絶対存在が在るかぎり、人間存在も在りつづける。そのため、イブン・アラビーの代表的著作である『叢智の台座』(Fuṣūṣ al-ḥikam)では、終末が訪れ、人間の存在化が止まることについての彼の議論は曖昧である。それは、コスモス全体から見れば、人間存在の存在化が止まることは絶対存在という流出の源が止まっていることを意味するからである。

この存在論に基づくとき、生と死に関するイブン・アラビーの議論もまた、他のスーフィーたちと同じく終末論的な傾向によって論じられていない。むしろ、生と死は、神という存在への没

入として論じられる。彼は「愛」(al-hubb)という語を用いることで、人間による神の献身の重要性を論じている。すなわち、人間が神を愛するとき、神もまた人間に呼応して、人間を愛するというものである。イブン・アラビーによれば、人間による神への愛は、死をもってなされるという。すなわち、神へ没我的に関わることは自我を死することなのである。

精神と肉体の関係性に関して、死とは、イスラームにおいて、精神(魂)が肉体から解放されることとみなされる。この解放は、肉欲によって妨げられてきた精神が、ようやく本来的な状況を回復することである。人間がこのような精神的充足感を得ることを、イブン・アラビーは「味得」(zawq)の語によって表現する。この語は人間が神と一体化することで、人間が神について会得する状況を意味している。死による味得は、神との合一によって得られる味得ではなく、自らが肉体的な死という体験を通して得る精神的な昇華である。それゆえ、人は肉体的な死によって、初めて精神的な生 本当の生 を得るという死生観が、イブン・アラビーによって提起されるのである。このことは、「人々は眠っている。彼らが死んだとき彼らは目覚めるのだ」というアリー(スンナ派の第四代カリフで、シーア派の初代イマーム)の言葉が引用されながら、死と生が論じられている。

さらに、このハディースは、存在の境位に関するイブン・アラビーの議論において、死と結び付けて論じられている。彼は、現実世界のあらゆるものを「想像」(khayāl)とみなす。ここで言う想像とは、絶対者のみが実在であり存在であるゆえに、人間を含んだあらゆる諸存在は幻想にすぎないという意味である。このことを知ることが、絶対者という存在について神秘的に知ることであるゆえに、神秘主義者には不可欠である。それは、実在について覚知することが自らの存在を知ることだからである。この覚知こそが、存在に対する真の目覚めである。実在を真の意味で認識するために、求道者たちである神秘主義者たちは絶対者の視点に立つ必要がある。そのための手立てが、絶対者のなかで死ぬことである。絶対者のなかで消滅(fanā')することによって死に、絶対者ととともに存続(baqā')することによって、彼らは目覚めて生きるのである。このように、イブン・アラビーは死という語を用いることによって、自らの存在論をイスラームというコンテキストの中から論じた。

イスラーム神秘思想における生と死の表象は、イスラーム的なコンテキストに基づきながらも、クルアーンが提示している来世中心的世界観ではなく、むしろ現世をいかに新たななかたちで捉えなおすかに関心が置かれている。また、生と死は、現世の以前と以後から続く大きな枠組みのなかで捉えられていた。言い換えれば、イスラームにおける生と死とは、現世だけではないより広い時間的・存在論的連続のなかから理解されるべきものなのである。

生と死は不可避な事象であるために、スーフィーたちもまた自らの思想のなかに、その状況を位置づける必要がある。神との関係性を考えるうえで、創造者である神から人間に付与された最大ものが人間の生、もしくは死であるゆえに、生をそれぞれの思想的コンテキストで捉えることは不可欠である。この本来的な生の在り方を問うことは、現在の生の意味を省察することでもある。このとき、思想における生と死は、現実世界において体験される生と死と結び合う。

イスラーム思想史において、スーフィーたちの思想の特徴として、彼らの思想が厭世的であり、かつ来世志向的であることが指摘されてきた。確かに、現世において価値が広く共有されている地位や名誉を追求せず、来世で相まみえる神と現世において合一しようとするという意味で、彼らの思想は確かに厭世的な側面を有している。しかしながら、彼らの神秘思想に現れた生と死の表象から彼らの死生観を考察するとき、彼らが探究したものは生の本来的な意味であった。まさしく、いかに生きるべきかという課題に関する彼らの思想である。

本当の生を探究することによって、彼らが肉体的な死を迎えるまでに成すべきことが、逆説的ななかたちで示されていることが明らかになった。また、本当の生の探究のなかで、彼らは、彼らの生の終わりを意味する死を受け入れるための準備をも行なっていた。死後に訪れる生こそが本当の意味で生に目覚めるというイブン・アラビーの主張は、一見したところ確かに厭世的である。しかしながら、彼の議論は死を積極的に意味づけるものでもあった。

したがって、イスラーム神秘思想を生と死の表象から捉え直すとき、彼らの生と死に関する議論は、彼らが追い求める「本当の生」の帰結であった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 3件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 Makoto Sawai	4. 巻 -
2. 論文標題 " Ibn 'Arabi on the Perfect Man (al-insan al-kamil) as Spiritual Authority: Caliph, Imam, and Saint "	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 The Bridge of Cultures: Potentiality of Sufism	6. 最初と最後の頁 49-60
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Makoto Sawai	4. 巻 11
2. 論文標題 " Re-experiencing the Myth of Adam: the Primordial Covenant on Junayd 's Idea of Fana' and Baqa' "	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies	6. 最初と最後の頁 4-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 ISHIDA Yuri, Makoto Sawai	4. 巻 113
2. 論文標題 " A Practical Research Guide to Libraries in Arab Republic of Egypt "	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 The Review of Osaka University of Economics and Law	6. 最初と最後の頁 15-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 澤井 真	4. 巻 21
2. 論文標題 「男/女の解消：スーフィーの人間観」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『ジェンダー研究』	6. 最初と最後の頁 145-155
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高橋圭、小野仁美、後藤絵美、澤井真	4. 巻 21
2. 論文標題 「現代イスラームにおける『伝統』の継承とジェンダー：序論」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『ジェンダー研究』	6. 最初と最後の頁 109-120
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 澤井真	4. 巻 262
2. 論文標題 「スーフィズムにおけるイブン・アラビー」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『歴史と地理 世界史の研究』	6. 最初と最後の頁 49-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Makoto Sawai	4. 巻 -
2. 論文標題 Salvation through Saving Others: "Toward a Tenrikyo-Muslim Comparative Theology for Japan Today"	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 International Journal of Asian Christianity	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計26件（うち招待講演 6件／うち国際学会 12件）

1. 発表者名 Makoto Sawai
2. 発表標題 "Beyond Commentary: Dawud Qaysari's Spiritual Authority"
3. 学会等名 The First International Symposium of Kenan Rifai Center for Sufi Studies (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 澤井 真
2. 発表標題 「生と死からみたイスラーム神秘思想」
3. 学会等名 印度学宗教学会第59回学術大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Makoto Sawai
2. 発表標題 “Islamic and Arab Spirit with Western Learning: How were Sufis treated in Modernity?”
3. 学会等名 International Workshop: Producing Traditions, Knowledge and Identities: Muslim Intellectuals in the Contemporary World
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 澤井 真
2. 発表標題 「近代イスラームにおける「神秘主義」言説」
3. 学会等名 日本宗教学会第76回学術大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Makoto Sawai
2. 発表標題 “Spiritual Caliphate in Dawud Qaysari's Commentaries.”
3. 学会等名 German Oriental Studies Conference (33 Deutscher Orientalistentag) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 澤井 真
2. 発表標題 「イブン・アラビー学派初期における靈的カリフ（権威）論の展開について」
3. 学会等名 日本オリエント学会第59回学術大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 澤井 真
2. 発表標題 「イスラームの近代化と改革思想 ムハンマド・アブドゥッフのスーフィー観を中心に 」
3. 学会等名 スーフィズム・聖者信仰研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 澤井 真
2. 発表標題 「マーク・セジウィックによるスーフィズムの分析枠組みとしての“五極構造”についての情報提供」
3. 学会等名 科研A「イスラーム神秘主義の構造的理解」2017年度第一回研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Makoto Sawai
2. 発表標題 “Life and Death as metaphor in the Divine Unity”
3. 学会等名 1st International Sufi Studies Graduate Student Symposium (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 澤井 真
2. 発表標題 「男／女の解消：スーフィーの人間観」
3. 学会等名 日本中東学会第34回年次大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Makoto SAWAI
2. 発表標題 “ The Disappearance between Man and Woman: The Sufi View on Human Existence ”
3. 学会等名 World Congress for Middle Eastern Studies Seville 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 澤井 真
2. 発表標題 「イブン・アラビー思想における人間論」
3. 学会等名 日本宗教学会第77回学術大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 澤井 真
2. 発表標題 「イブン・アラビーの思想におけるアダム 『人間』概念との関わりから」
3. 学会等名 イスラーム地域研究若手研究者の会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 澤井 真
2. 発表標題 「悲から出でる喜び イスラームの神秘思想家たちの語りを通して」
3. 学会等名 「アジア・アフリカにおける諸宗教の関係の歴史と現状」研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Makoto Sawai
2. 発表標題 “ Sufi Studies in Gender Equality: Re-reading Ibn 'Arabi ' s Anthropological Thought ”
3. 学会等名 The Annual Conference of the British Association for Islamic Studies (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 澤井真
2. 発表標題 「イブン・アラビー学派における完全人間論の展開」
3. 学会等名 日本中東学会第35回年次大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 澤井真
2. 発表標題 「イスラーム神秘主義における人間の位置」
3. 学会等名 印度学宗教学会第61回学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 澤井真
2. 発表標題 「ジューリーの存在の自己顕現論におけるムハンマドとアダム」
3. 学会等名 日本宗教学会第78回学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 澤井真
2. 発表標題 「井筒俊彦とイスラーム神秘主義」
3. 学会等名 国際研究フォーラム井筒「東洋哲学」と宗教研究（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Makoto Sawai
2. 発表標題 “ Following the Foundress of Tenrikyo: The Role of Religions for Deeper Learning ”
3. 学会等名 International Conference on Comparative Theology (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Makoto Sawai
2. 発表標題 “ Inter-faith Understanding in the Post-Earthquake Recovery: From the Perspective of Tenrikyo Theology ”
3. 学会等名 International Workshop for Comparative Theology in Asia (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Makoto Sawai
2. 発表標題 Japanese Value-driven Culture and Islamicate Universal Culture: Islamic Views of Life and Death”
3. 学会等名 Talk Series Malaysia-Japan Intellectual Exchange (Japan Foundation Kuala Lumpur) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Makoto Sawai
2. 発表標題 “ Islamic Studies and the Modern World: Prospects and Challenges ”
3. 学会等名 Talk Series Malaysia-Japan Intellectual Exchange (Japan Foundation Kuala Lumpur) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Makoto Sawai
2. 発表標題 “ The History of Studying Islam in Japan ”
3. 学会等名 Talk Series Malaysia-Japan Intellectual Exchange (Japan Foundation Kuala Lumpur) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Makoto Sawai
2. 発表標題 “ Mercy for Mankind: On the Relevance of Ibn 'Arabi ”
3. 学会等名 Talk Series Malaysia-Japan Intellectual Exchange (Japan Foundation Kuala Lumpur) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 澤井真
2. 発表標題 「『イスラーム神秘主義』と『スーフィズム』 イスラーム神秘思想に対するまなざしの変遷 」
3. 学会等名 第331回天理大学おやさと研究所研究報告会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 U-PARL (東京大学附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門) 編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 232
3. 書名 『世界の図書館から アジア研究のための図書館・公文書館ガイド』	

1. 著者名 鈴木岩弓・木村敏明編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 岩田書院	5. 総ページ数 -
3. 書名 『生と死の表象』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>アウトリーチ活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「オリンピックをもっと面白く観るために イスラーム教を知る 」(京都大学学びコーディネーター)、大阪桐蔭高等学校、2017年11月8日。 ・「オリンピックをもっと面白く観るために イスラーム教を知る 」(京都大学学びコーディネーター)、京都大学、2017年11月15日。

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----